東洋史研究
第三十五巻　第四號　昭和五十二年三月　發行

ティムール朝末期の内訌をめぐって

堀川徹

はじめに

一四六九年に、スルターン・アブー・サイード・ミールザー Sulṭān Abū Sa'īd Mīrzā（以下 Sulṭān を Sl.、Mīrzā を M. と略す）が歿するや、それまでまがりなりにも統一を保っていたティムール朝は、ヘラートを中心とするスルターン・フサイン・ミールザー Sl. Ḥusayn M. 政権と、アブー・サイードの長子スルターン・アフマド・ミールザー Sl. Aḥmad M. が統べるサマルカンド政権とに分裂する。小論で取上げるサマルカンド政権について言えば、アフマド自身が直接統治したのは、サマルカンドやブハーラーを中心とした所謂マー・ワラー・アンナフル地方であって、テルミズ、バダフシャーン、ヒサール、クンドゥズといったアム河上流域地方では、彼の同母弟スルターン・マフムード・ミールザー Sl. Maḥmūd M. が、フェルガーナ盆地では、異母弟ウマル・シャイフ・ミールザー 'Umar Shaykh M. が、それぞれ、兄からほぼ獨立して君臨していた。彼ら、とくにアフマドとウマル・シャイフとは對立し、戰鬪を繰返したが、それでも一四九四年までの二五年間アフマド政権は表面的には安定を保っていた。ところが、同年六月ウマル・シャイフが歿し、續いて七月にアフマドが薨ずるや、俄然サマルカンドの支配權をめぐる爭奪戰が開始される。

小論で扱うのは、一四九四年から、ウズベグ族のシャイバーニー・ハン Shaybānī Khān がサマルカンドを占領する一五〇〇年までの約六年間である。この時期は、中央アジアにおいて、ティムール朝が衰亡し、それに代って所謂シャイバーニー朝が勃興するという歴史の轉換期に當たる。私は、この混亂期を把握することによって、直接的には、ティムール朝史やシャイバーニー朝史を、さらには、當時の中央アジア史全體を理解する爲の足掛が得られると考える。ところが、わが國においては、根本史料に據った研究が皆無であるばかり[1]でなく、事典あるいは概説書の類でも、例えば、君主（ミールザー）の在位年間の記述一つとってみても、誤りというよりむしろでたらめに近いことに氣附く。そこでまず、この六年間に繰廣げられたサマルカンド爭奪戰の經緯を、主として、ムガール朝の創始者バーブルの自敍傳『バーブル・ナーマ』*Bābur-nāma*（以下 BN と略す）[2]に據りつつ順を追って記述し、當時の雰圍氣・全體的イメージを傳えることを、小論の第一の目的としたい。それはすなわち、シャイバーニー・ハン興隆の歴史的背景を知ることにもなるであろう。第二に、內訌の性格を明らかにすることをめざす。そして、その作業を通じて、ティムール朝國家の權力構造を解明する爲の糸口を探り出すことが、第三の目標である。

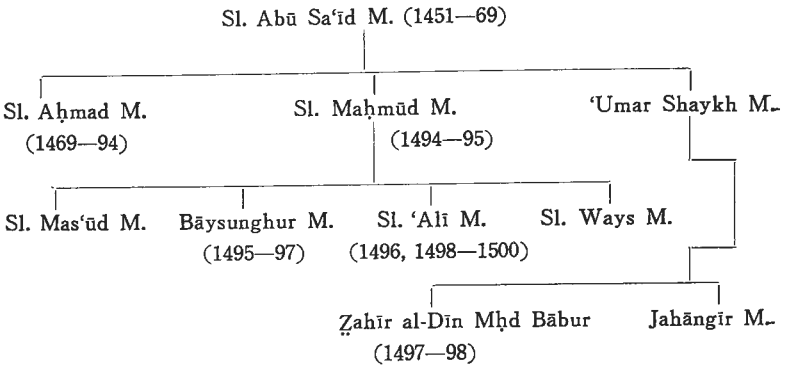
一

サマルカンド爭奪戰の舞臺に登場する人物を分類すれば、五つのグループに分けることができよう。

(1) ティムール家の皇子 mirzā たち。

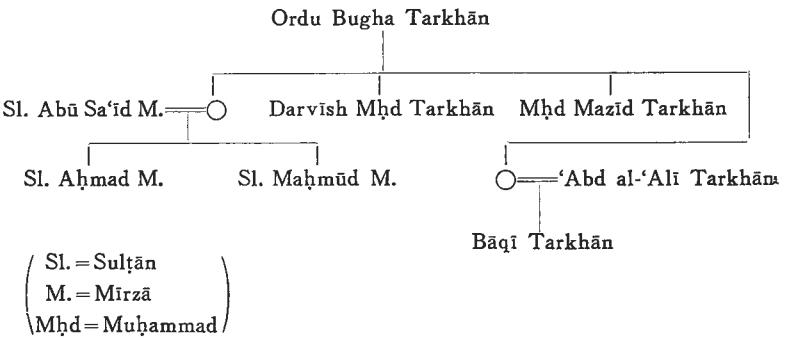
系圖1から解る様に、アフマドには男子がなかった。彼を嗣いだのが、弟マフムードで、その後をマフムードの次子バイスングル・ミールザー Bāysunghur M. が襲った。彼は、回曆八八二年（一四七七／七八）に生まれ、一四九九年にホスロー・シャー（後述）に弑される。聰明で人間味があり、性質の良い優れた君主で、書畫・詩作にも長じていたという（BN 685）。バイスングルを追って、サマルカンドを入手したのが、ウマル・シャイフの長子ザヒール・ウッディーン・ム

系圖 I



( ) 內は1451年—1500年間の在位（サマルカンド）年間

系圖 II



ハンマド・バーブル Ẓahīr al-Dīn Muḥd Bābur（一四八三年二月一四日生―一五三〇年一二月二六日歿）である。彼は、一四九四年、數え年一二歳で父の後を嗣ぎフェルガーナの支配者となった。一四九七年から翌年にかけて百日間サマルカンドの主となったのをはじめ、一五〇〇年、一五一一年には、一時的ではあったが、ウズベグ軍の手からサマルカンドを奪還している。文武兩道に優れた傑物であったことは、自敍傳『バーブル・ナーマ』の文章からも容易に察知できよう。次いで、マフムードの三男スルターン・アリー・ミールザー Sl. ʿAlī M. がサマルカンドを奪取する。彼は『ウズベク共和國史』が記しているように優柔不斷な人物であったようだ。彼の母親ズフラ・ベギ・アーガー Zuhra begi Āgā はウズベグ族出身の側室であったが、それが、一五〇〇年にシャイバーニー・ハンがいとも容易にサマルカンドを占領するきっかけとなった。彼は一五〇〇年にシャイバーニーの手で殺害される。

このほかに、爭奪戰に關わってくる皇子として、マフムードの長子スルターン・マスウード・ミールザー Sl. Masʿūd M. と末子スルターン・ワイス・ミールザー Sl. Ways M.（ハン・ミールザー Khān M.）とが擧げられる。マスウードは凡庸な人物で、父マフムードがサマルカンドへ上った後を受けてヒサールを支配したが、結局サマルカンドの玉座へ卽くこともなく一四九八年にホスロー・シャーの手で盲とされ一五〇七年に歿する。一方ワイス・ミールザーは、父が薨じた時、母親に連れられて伯父スルターン・マフムード・ハンの居城タシュケントへと赴いた（BN 12a）。マフムード・ハンは、その時直ちにサマルカンドへ向けて出馬している。ワイス・ミールザーの背後には、マフムード・ハンを中心とするモグール勢力が控えていることを常に念頭に置く必要があろう。彼は一五二一年に他界した。

(2) アミール amīr（ベグ beg）たち。

爭奪戰の實質的な擔手は、後述するように、アミール層であったと考えられる。その中でも、とくに重要な役割を演じる三人を紹介しよう。

バルラス Barlās 部のアフマド・ハージー・ベグ Aḥmad Ḥājji Beg。アブー・サイードは、最初彼にヘラートの支配

權 ḥukūmat を、その後サマルカンドのそれを與えた。彼はアフマド・ミールザーのもとで最も有力なアミールの一人であった。勇敢で恐れを知らぬ人ではあったが、戰鬪での指揮はそれ程でもなかったという。自家産の快足馬を飼育して乘り回す一方、ワファーイー Wafā'ī というペンネームを持つ詩人でもあった (BN 21a—21b)。次は彼の作品である。

醉ぱらったよ よう 見廻り役さん 今日は見逃してくれ　素面(しらふ)だとわかる日に 俺を捕まえてくれ[7]

彼の性格を彷彿させるではないか。かの有名な詩人ミール・アリー・シール・ナワーイー Mīr 'Alī Shīr Nawā'ī とも親交があり、ナワーイーがヘラートからサマルカンドへやって來た時には彼を庇護している。[8] 一四九六年、戰鬪中捕えられて殺害される。

アフマド・ハージー・ベグと勢力を二分していたのが、ダルヴィシュ・ムハンマド・タルハン Darvish Muḥd Tarkhān であった。[9] 敬虔で人間味豐かなダルヴィシュ・タイプの人で、常にコーランを書寫していた。チェスと鷹狩とが得意であった。アフマド・ミールザーのもとで「總てのベグより偉大で尊敬されて」いたと、バーブルは傳えている (BN 21b)。彼はタルハンの特權[10]を持ち、また系圖Ⅱから解る樣に、弟のムハンマド・マズィード・タルハン Muḥd Mazīd Tarkhān とともに、アフマド・ミールザー、マフムード・ミールザー兄弟の叔父に當たることを利して、強大な權力を手中に收めていた。一族の中で、妹婿のアブドゥル・アリー・タルハン 'Abd al-'Alī Tarkhān とその子バーキー・タルハン Bāqī Tarkhān とは、ブハーラーの支配權を握っており、ウズベグ族のシャイバーニーも、一時アブドゥル・アリーの庇護を受けたことがある。彼の從士 nukr (＜nökör)[11] は三千人に、息子バーキーのそれは五・六千人に達したという (BN 22b)。ダルヴィシュ・ムハンマド・タルハンをはじめとするタルハン家一族が、當時、支配者層內において特に高い地位を占めていたことは疑いない。

ホスロー・シャー Khusraw Shāh。彼に關しては、バーブルが見事に敍述している (BN 28b—29a)。

トルキスターン[12]のキプチャク族出身である。幼少の時、タルハンのベグたちに近侍していた。正に「小姓 chuhra で

あった。[19]」その後、アルグン族のマズィード・ベグの従士となった。またたく間に目を掛けられた。イラクの災難の時、[14]スルターン・マフムード・ミールザーに加わって途中で立派に仕えた為に、スルターン・マフムード・ミールザーは寵愛していた。のち、非常に勢力が増大した。スルターン・マフムード・ミールザーの時代に、なんと従士は五・六千人に達していた。アム河からヒンドゥークシの山までの地方で、バダフシャーン以外は總て彼に屬した。税の徴收できる土地 darobasta yer だ。[15]饗應(もてなし)は良かった。氣前が良い。トルコ的貪欲さで見附け出す人だ türklük mulkam paydā konanda edi が、同様に、見附けてきた物をまた大いに浪費した。スルターン・マフムード・ミールザーの歿した後、彼の息子たちの時代に、自分は非常に強大となった。従士は二萬人に達していた。祈禱は行なったけれど、そして、〔タブーの〕食物を控えていたけれど、しかし、後ろ暗くみだらであった。ばかで低能で不實で恩知らずの人だった。五日間の移(うつろ)い易き世界の爲に、一人の、自分を育てた恩人の息子を盲とした。また一人を弑した。神の前では罪人で、民の前では墮落していた。最後の審判の籠まで、呪詛が相應しかった。この移い易き世界の爲にかような惡事を行なった。そして、かくも廣大な豐かな地方と、かくも重裝備の従士とをもってしても、一羽の雌鷄とさえ相見えなかった。

一介の小姓から萬戸のアミール[16]にまで成上り、遂には、自分の主君の子の一人マスウードを盲目にし、別の一人バイスングルを弑すに至るホスロー・シャーの人物像が浮び上がってくるようである。彼は一五〇五年にシャイバーニーに殺害される。

(3) ホージャ家。

ホージャ・ウバイドゥッラー Khwāja 'Ubaydallāh（ホージャ・アフラール Khwāja Aḥrār）の二人の息子もこの權力抗爭に一役買っている。ホージャ・アフラールはナクシュバンディー教團の長で、その宗教的權威は絶大であった。また、マー・ワラー・アンナフル隨一の地主であり商人でもあった。すなわち、彼は中央アジア各地に一三〇〇にものぼる土地を

持ち、ただサマルカンド地方の所領から國家へ納入するウシュル（十分の一税）だけで、穀物八萬マン——千六百トン——に達したというし[17]、東トルキスタン、ホラーサーン、そして西アジア各國と商取引があったという。[18] この様に、宗教的權威と世俗的權威とを併せ持ち、それを背景としてティムール朝（とくにアフマド時代）の政治史に大きな影響を與えた。[19] 彼の息子たちも同様で、[20] その力はアミールらを凌ぐ程であった。一四九六年のクー・デター事件の際、兄のホージャ・ムハンマド・アブドゥッラー Khwāja Muḥd ʿAbdallāh（ホージャカ・ホージャ Khwājaka Khwāja）と弟のホージャ・ヤフヤー Khwāja Yaḥyā とは互いに反對派に回って敵對する。その後、ヤフヤーは、アリー・ミールザーのもとにあって政治的影響力を發揮し活躍するが、兄のムハンマドはこれという目立った働きをしない。

次いで、外部勢力に目を移そう。一五世紀中葉、イリ地方を中心とした所謂モグーリスターンではモグール勢力が、キプチャク草原ではウズベグ族がそれぞれ優勢であったが、やがて、ウズベグから分れたカザーク族がキプチャク草原では有力となってくる。ティムール朝の內訌に干渉してくるのは、このうち、モグールとウズベグの二勢力である。

(4) スルターン・マフムード・ハン Sl. Maḥmūd Khān（モグール族）。

彼はチャガタイ・ハンの後裔である。一四八七年に、父ユーヌス・ハン Yūnus Khān の後を襲ってモグーリスターンのハン位に卽いた。ユーヌスは、青年期をティムール朝領內西部で送った人で、[21] アブー・サイードが政權を確立した時、その援助を得てモグーリスターン・ハン國の主となった。「荒野のチュルクら」Atrāk-i ṣaḥarāʾī とは違って、髯も豐かな、立派な「タジークの容貌」Tajik chihra をしていたという（TR, MS. 67b）。ユーヌスは、三人の娘をアブー・サイードの三人の息子——アフマド、マフムード、ウマル・シャイフ——にそれぞれ嫁がせており、[22] その外戚關係を利用してしばしばティムール家の內紛に介入し、一四八五年には巧みな外交戰術によってタシュケントを手中に收めることに成功した。マフムード・ハンは、こうした父の「遺産」を相續したわけである。彼は、タシュケントを根據地として、シャールヒーヤから、一四九五年にはウラテペへと勢力を擴張させたが、サマルカンドを入手することは遂にできなかった。[23] 結局

一五〇三年にシャイバーニー・ハンに敗れ、その時は助命されたものの、回暦九一四年（一五〇八／九）、同じシャイバーニーに殺害される。

(5) シャイバーニー・ハン Shaybānī Khān（ウズベグ族）。ジョチ・ハンの第五子シバン・ハンの後裔である。一五世紀中頃、キプチャク草原に遊牧ウズベグ國家[24]を建設したアブル・ハイル・ハン Abū al-Khayr Khān（在位一四二八―六八年）の孫に當たる。一四五一年に生まれ、一四六八年にアブル・ハイルが歿して部衆が離散した際、彼も亡命の旅に出る。この「放浪」qazāq の時代に、一時、ブハーラーのアブドゥル・アリー・タルハンのもとに身を寄せていたことは既に述べたが、一四八八年のアフマド・ミールザーとマフムード・ハンとの戦に、アブドゥル・アリーの一將校として從軍。戦に際してマフムード・ハン側に寝返り、マフムード軍勝利の立役者となる。そして、これを契機として[25]、オトラルからトルキスターン地方を支配下に收めることに成功する。一四九六年から翌九七年にかけて[26]、四散していた一族やアブル・ハイルの遺衆を集め、遊牧ウズベグ集團の再統合を果たして、遂に一五〇〇年にはサマルカンドを占領するのである。彼は、長期間亡命生活を送った爲か、この様になかなか權謀術策に長け機をみるに敏い人であった。一五一〇年に、サファヴィー朝の創始者シャー・イスマーイール Shāh Ismā'īl とメルヴで戦って敗れ殺害される。

以上、サマルカンド爭奪戦の舞臺に登場する主な人物を紹介してきたが、それでは、その經緯はどの様であったのか。順を追って記してみよう。

二

一四九四年七月、スルターン・アフマド・ミールザーがフェルガーナ遠征の歸途四四歳で歿するや、サマルカンドのアミールたちは、彼の弟スルターン・マフムード・ミールザーのもとへ人を走らせて、サマルカンドの支配者となるよう求

めた。マフムードは、直ちにヒサールを出立してサマルカンドへ到着。極く容易にそこの玉座に納まった。が、彼の幾つかの惡行の故に、貴賤兵民を問わず彼を嫌惡し忌避したとして、バーブルは三つの事例を擧げている（BN 23a—24a）。まず第一に、自分より先にサマルカンドへ到着して玉座を狙ったマリク・ムハンマド・ミールザー Malik Muḥd M.——アブー・サイードの兄ミヌーチー・ミールザー Minūchi M. の息子で、マフムード自身の女婿——および、三人の王子を捕えて「青の宮殿」Kök-saray[27]へ送り、マリク・ムハンマドともう一人の王子とを處刑した。マリクが有罪であった事は確かだが、もう一人の王子には何の罪も無く、[28]殺すなどもっての外だとバーブルは非難している。第二に、彼は行政・司法・財務に長じていたが、性格は惡性と墮落とに傾いていた。サマルカンドへ到着するや否や、從來とは異なる法規 tarīb vä nasaq や、租稅 kharj・徭役 taḫmīl の基を作り始めた。ことに、それまで故ホージャ・アフラール猊下の保護下に稅や徭役を逃れていた貧民たちから強奪する様になった。そして、さらに、こうした強奪はホージャ猊下の息子たちにも及んだ。第三に、マフムードが非道な様に、その部下たちも惡行の限りを盡した。とくに、ホスロー・シャー麾下のヒサール人は飮酒・姦通に現をぬかしていた。さらに彼らは、都市民や商人、チュルクや騎兵の見境もなく、若くてハンサムな青年を男色の對象とした。その爲に、人々は恐れて家から出られぬ有様であった。サマルカンドの民衆は、アフマドの治政下で二五年間安穩な生活を送っていた。民心はマフムードから離れ、貴賤を問わず呪咀の聲を上げ拳を擧げたと。

こうした中で、マフムードは、一四九五年一月、重病を患い病臥六日にして他界した。彼のサマルカンド統治期間は半年にも滿たなかった。

マフムードが歿した時、ホスロー・シャーは、彼の死を隱して祕かに國庫を横領せんと企てた。ところがマフムードの訃報はたちまち町中に擴まり、騎兵や民衆はホスロー・シャーに攻撃を仕掛けようとした。そこで、タルハンらとアフマド・ハージー・ベグとは騷ぎを鎭める一方、ホスロー・シャーをヒサールへと放逐した。

さて、マフムードが薨じた時、長子マスウードはヒサールに、次子バイスングルはブハーラーに居た。サマルカンドと

ヒサールとのアミールたちは、談合の上、ブハーラーから一八歳のバイスングルを招いて空位となったサマルカンドの玉座に卽かせた。この機を捉えて、モグールのマフムード・ハンが進攻して來る。バルラース部のジュナイド Junayd とサマルカンドの高官ら akābir との誘いがあったという（BN 30a—30b）から、サマルカンドの支配者層内部にはバイスングルの卽位に贊同しない者も居たと思われる。が、新君主は多數の精銳を結集してモグール軍を迎撃、これを擊破した。この戰は當時非常に有名となり、諸史料にその記事が見えるが、なかでウズベグ史料は、「三千人」のモグールが殺されたと[39]、また、BN は、バイスングルの面前で頸を刎ねられた者の「數が多かったので、三箇所に天幕が移される程」であったと記している（BN 30b）。マフムード・ハンは、この敗戰によってサマルカンド爭奪戰から一步後退する。

翌一四九六年五／六月に、バイスングルを廢してスルターン・アリー・ミールザーを擁立せんとするクー・デターが勃發した。その詳細は以下の如くである（BN36a—37b）。

バイスングルは、ヒサールのアミールや騎兵を重用して、サマルカンドのそれらを疎んじた。とくに、バルラース部のシャイフ・アブドゥッラー Shaykh ʿAbdallāh を寵愛し、その息子たちとは「相思相愛の仲」であった。これが、タルハンたちやサマルカンドの幾人かのベグを刺激した。ダルヴィシュ・ムハンマド・タルハンは、自らカルシーへと赴き、そこからスルターン・アリー・ミールザーを伴ってサマルカンドへ戻った。そして、同志と共にアリーを玉座に卽かせる一方、バイスングルを拘引して「青の宮殿」へ連行しようとした。しかし、バイスングルは計略を用いて逃れ、ホージャ・アフラールの長子ムハンマド（ホージャカ・ホージャ）に保護を求めた。ホージャは彼を匿って、翌朝押しかけたクー・デター派の連中を追拂った。一・二日後、ホージャ・アブル・マカーラム Khwāja Abū al-Makārram とアフマド・ハージー・ベグとを頭とする何人かのベグや下位のベグや騎兵[40]、總ての都市住民 jamiʿ shahr eli は民衆暴動 hujūm-i ʿamm を起こしてバイスングルをホージャの家から連れ出し、スルターン・アリーとクー・デター派のタルハンらとを內城に圍んで一日で攻略した。クー・デターの主謀者らのうち、ムハンマド・マズィード・タルハンはブハーラーへと逃れ

たが、兄のダルヴィシュ・ムハンマド・タルハンとスルターン・アリー・ミールザーとは捕えられた。ダルヴィシュは處刑され、アリーは「青の宮殿」へ送られて「兩眼に熱した鐵棒を當てられた」közlärigä mil tartilar。ところが、刑執行人の意圖か怠慢かで傷がつかなかった。アリーは逃れてホージャ・ヤフヤーの家に潛み、數日後、今やタルハンらの根據地となったブハーラーへと落ちのび、ホージャ・ヤフヤーもこれに續く。奇しくも、兄バイスングルには兄のホージャカ・ホージャが、弟アリーには弟のホージャ・ヤフヤーが味方して、サマルカンドとブハーラーとに對峙することとなった。その後、兩者の間に小競合があった際、アフマド・ハージー・ベグはアリー軍の手に落ちて處刑される。彼を失ったことは、バイスングル陣營にとって大きな痛手であった。

このような狀況を知って、各地の勢力が介入してくる。その一人は、フェルガーナのバーブルである。彼は一四九六年六／七月にアンディジャーンを出立した。一方、ヒサール方面からは、スルターン・マスウード・ミールザーがホスロー・シャーの弟ワリー Wali の軍を併せて、シャフリ・サブズ（ケシュ）經由でサマルカンドをめざした。これらとブハーラーのアリーとは、東南西三方からサマルカンドを包圍した。攻圍は三・四ケ月に及んだが、城は堅く冬の到來も間近な折から、アリーとバーブルとはそれぞれブハーラーとアンディジャーンとへ戻った。尙、この間に、ホージャ・ヤフヤーの仲介で兩者の間に同盟が成立した。マスウードは、目當のシャイフ・アブドゥッラーの娘を娶るとヒサールへ引揚げ、二度とサマルカンドをめざすことはなかった（註⑤參照）。

この年の冬、バイスングルは攻勢に轉じてサレ・プル Sar-i pul に駐留。一方、アリーも出陣して、兩軍對峙の裡に翌一四九七年の春を迎える。五月、バーブルはアリーとの盟約に從って出馬。アリーとバイスングルとが對峙しているとの報に接するや、二・三千人の先鋒軍を急ぎ遣した。バイスングルは、バーブルの到來を知ってサマルカンドへ退却する。

バーブル自身は、ラマザーン月三〇日[37]（一四九七年六月一日）にシーラーズ[38]へ到着。翌日、斷食明けの祈禱を濟ました後、サマルカンドへ向かった。アーベ・ヤール Āb-i yār なる禁地 qoruq でバイスングル軍の將兵三・四百人の投降を

受入れ、ザラフシャーン河を渡って、サマルカンドから三クロフ kuroh（約六マイル）のハン・ユルトゥ Khān Yurti に幕営した。[33] この地に四・五〇日駐留する間に、サマルカンド軍と何回か小競合があり、また、内應のトリックにかかって數人の精鋭を失ってもいる。包圍は長期に亙ったが、この間の出來事としてバーブルは、

この幕營地 yurt に居る間に、サマルカンドから都市民 shahrī や商人 bāzārī が、宿營 ordu が一つの町となってしまう程數多くやって來た。町で求めようとする物なら何でも宿營で見られた。この間、ただサマルカンドを除いて、總ての城塞 qurghan や山地 tagh や平地 tüz が支配下へはいってきた。

と傳えている（BN 40b）。この記事から、まず、サマルカンドのバイスングル政權が、マー・ワラー・アンナフルの諸勢力に見棄てられ政治的・軍事的に全く孤立してしまったことを知る。また、バーブルの軍營が都市住民、とりわけ商人らの來集で賑わったのに反し、城内のバイスングル軍は、バーブルがサマルカンド占領後に惱まされる様に、物資、とくに兵糧が缺乏して窮地に立たされていた。政治的・軍事的・經濟的に孤立したバイスングルは、こうした不利な局面を一擧に打開せんと、ウズベグのシャイバーニー・ハンに援軍を依頼した。シャイバーニーは、この年（一四九七年）の秋晩く、サマルカンド城外に姿を現わした。しかし、バイスングルとの會見は不調に終り、失意の裡に本據地のトルキスターン地方へと戻って行った。七箇月間の包圍に耐えてきたバイスングルにとって、シャイバーニーとの軍事同盟が最後の切札であった。それが雲散した今、彼はサマルカンドを拋棄して、二・三百人の飢えた一族と共にホスロー・シャーの支配するクンドゥズめざして落ちて行った。

回曆九〇三年ラビー第一月の末（一四九七年一一月末）[34]、バーブルは主を失ったサマルカンドへ無血入城した。しかし、彼の支配も長くは續かなかった。その理由をバーブル自身ほぼ次の様に述べている（BN 51a—53b）。

まず、サマルカンドを除く全地域は、バーブル若くはブハーラーのアリーに降服していたので、そうした地方は襲撃しなかった。もっとも、うち續く戰亂とウズベグやモグールの入寇[35]とによって、マー・ワラー・アンナフルは全域に亙って

疲弊しており、「かくも痛めつけられ、掠奪された諸地方から」muncha talān vä tārāj tartīqan wilāyatlardīn 多くは望めなかった。そして、七ケ月の籠城によって、サマルカンドの住民の經濟生活は、助力 madad と種子 tukhm と貸附金 taqāwī が必要であった程全く破壊されていた。こうした狀況がバーブル軍の將兵たちに影響を與える。彼らは、サマルカンドを占領した際に、戰利品を得ていたが、それらは間もなく底をついてしまった。ところが、バーブルにしてみても、彼らに與える物は何も無かった。將兵は困窮して望鄉の念にかられ、一人二人と逃亡を始めた。そして遂に、バーブル麾下の最有力者スルターン・アフマド・タムバル Sl. Aḥmad Tanbal もフェルガーナへ歸還してしまった。また、タシュケントのマフムード・ハンは、バーブルのサマルカンド攻擊には何の援助もしなかったのに、一旦陷落するや、アンディジャーンの割讓を要求してきた。一方、フェルガーナでは、先に逃亡したアフマド・タムバルらが、バーブルの弟ジャハーンギール Jahāngīr を擁立して、彼にアンディジャーンとアフスとを與える樣バーブルに迫った。バーブルが要求を蹴ると、彼らは、逃亡兵等を糾合し、ジャハーンギールを先頭に押立ててアンディジャーンを攻圍した。この報がサマルカンドへ屆いた時、バーブルは病床にあった。アンディジャーンは、家族の居住する地であり、彼の根據地であった。そこの確保を決意したバーブルは、病が癒えるや、一四九八年三月三日、百日間支配したサマルカンドを後にアンディジャーンへと向かった。

結局この時、アンディジャーンはジャハーンギールの手に落ち、兩者は一五〇〇年の初頭までフェルガーナの統治權をめぐって爭うこととなる。[※]

バーブルが去った後、ブハーラーに居たスルターン・アリーがサマルカンドの玉座に卽く。といっても、實權は、一四九七年のクー・デター派のタルハンらが握っていた。BN に據れば（BN 76a—76b）、まず、アブドゥル・アリー・タルハンの後を嗣いでブハーラーの知事 ḥākim となっていたバーキー・タルハンは、ブハーラー政廳の收入を總て自分のものとし、他人には一錢も與えなかった。また、ムハンマド・マズィード・タルハンは、サマルカンド全地區の歲入を一族

の爲に取って、アリーには定められた少額の金 rātība を届けただけであった。こうした狀態に、一人前に成長したアリーが甘んじる譯はなかった。彼は、側近 ichki[37] と計って、ムハンマド・マズィードの暗殺を企てた。が、マズィードはこの計略を逸早く察知して、同志と共にサマルカンドから逃亡した。

彼らは、まず、ワイス・ミールザーを招聘することによってモグール軍との同盟を計った。マフムード・ハンは、ワイスにドゥグラート族のムハンマド・フサイン Muḥd Ḥusayn とアフマド・ベグ Aḥmad Beg 以下の大軍を附け、サマルカンドへ向かわせた。しかし、兩者の會談は決裂し、モグール軍は兵を返すが、アリーはこの機を捉えて追撃し勝利を博す。ムハンマド・マズィードらは次いでバーブルを招いた。バーブルは、同年（一五〇〇年）二月、弟ジャハーンギールと和解したところであったので、この誘いに直ちに應じてズール・カダー月（五／六月）出馬した。

この時、他の一軍がサマルカンドを攻撃していた。シャイバーニー・ハンに率いられたウズベグ軍である。[38] シャイバーニーは、サマルカンド攻圍中に、バーキー・タルハンに率いられたブハーラー軍の到來を知り、兵を轉じてダブースィ城下で一萬のバーキー軍を粉砕。ブハーラーを戰わずして陷し、再びサマルカンドへ向かった。一方、「ダブースィの戰」の報をウラ・テペで受取ったバーブルは、急行して、ハン・ユルトゥでムハンマド・マズィードらと合流した。そして、サマルカンド城内のホージャ・ヤフヤーと連絡をとり、彼から內應の承諾を得ることに成功した。バーブル軍は、夜陰に紛れてサマルカンドへ向かったが、この策動をアリーに通報する者が出た爲に事は露見し、彼らは退却を餘儀なくされる。この時、シャイバーニーがサマルカンドをめざしているとの情報がはいる。バーブルは、彼との衝突を避けてケシュへと退いた。

シャイバーニーがサマルカンド城外に再び姿を現わした時、アリーは政治的に全く孤立していた。彼に味方するのは、わずかばかりの側近のみで、ムハンマド・マズィードを始めとする有力なアミールは、ほとんどバーブル陣營へ加擔していた。更には、賴みとするホージャ・ヤフヤーまでも。腹背に敵を受けたアリーは、結局、シャイバーニーにサマルカン

ドを譲渡してしまう。この時のエピソードとして、BN は次の様に傳えている (BN 79b—80a)。

スルターン・アリー・ミールザーの母親ズフラ・ベギ・アーガーは、無知蒙昧にも、祕かにシャイバーニー・ハンのもとへ、「シャイバーニー・ハンが彼女を娶るならば、彼女の息子はシャイバーニー・ハンにサマルカンドを與えるであろう。彼の父親の領地を取った後に、〔それを〕スルターン・アリー・ミールザーに與えよ」という一文を持たせた人を遣した。

ズフラは宮廷内の諸事萬端を切り回していたが[39]、この記事から、彼女が、ウズベグ族の出身であることを利用してシャイバーニーとの接近を計ったことを知る。そして、盟約の條件が、サマルカンドはシャイバーニーに與えるが、ヒサールを中心としたアリーの父マフムード・ミールザーの舊領土をシャイバーニーが奪取した時は、それをアリーに與える、というものであったと思われる。シャイバーニーは、アリー陣營の提案を受入れ、いとも簡單にサマルカンドを占領した。HS に據れば、「マー・ワラー・アンナフルの數多くの貴紳・貴顯がハンの玉座の足下に集まって來」たという (HS s. 279)。一旦サマルカンドを入手したシャイバーニーにとって、アリーはもはや、利用價値の無い存在であった。彼は祕かに葬り去られた[40]。そして、ホージャ・ヤフヤーも、メッカへの巡禮の途次、シャイバーニー配下の者の手にかかる。

この様にして、一四九四年以來續いてきたティムール朝の內訌もここに幕を下ろす。そして、これから後の西トルキスタン史は、シャイバーニーを中心としたウズベグ軍と他勢力——バーブルやスルターン・フサイン・ミールザーらに代表されるティムール朝勢力、スルターン・マフムード・ハン、アフマド・ハン兄弟を中心とするモグール勢力、カザーク族、そして、シャー・イスマーイールのサファヴィー朝——との抗爭という形をとって新しく展開していく。一五〇〇年は、こうした意味で、歷史の一轉換點であったといえる。

三

ここでは、内訌の性格が如何様であったかを考えてみよう。

『ウズベク共和國史』はこの間の事情を、

> 國の政治的細分化と小支配者間の不斷の戰鬪とは、隊商貿易がほとんど絕えるという結果を齎した。（中略）町は手から手へと渡り、その際、新しい支配者は、その度毎に、自分の利益となる様住民に償金を課した。農民は、一年間に數回召集される軍事豫備役へ強制的に追いやられた。これら總ては、それでなくとも、既に限度なしの年貢や徭役の重荷の下で喘いでいた農民の經濟生活をさらに一層混亂させた。それ以外に、それぞれの勝利者側は、普通、なしえる限り住民を掠奪し、さらにその上、住民に臨時稅を課した。

と述べている。[41] 戰亂や、ウズベグ族・モグール族の侵攻によって、都市住民や農民が疲弊していたことは、前述したバーブルのサマルカンド占領の際の事情だけからも容易に推察できよう。こうした狀況が、ティムール朝末期の權力抗爭の背景となっていたことをまず確認したい。『ウズベク共和國史』はまたこの權力抗爭を、「特權を有するタルハン階級」、「ティムール家の數多くの小支配者」そして「《ナクシュバンディーヤ》敎團の首領で、最大の封建領主であるホージャ・アファラールの子孫」の間の流血戰と捉えている。[42] 私はまず、前述してきた様に、タルハン一家だけではなく、アフマド・ハージー・ベグ等に代表されるさらに廣汎なアミール層や、ウズベグ族、モグール族の勢力をも內側に包込んだ形で訌爭が續けられたことを指摘しなければならない。また、たとえこれらの事柄を別としても、果たして斯様に一言のもとで片附けられるのであろうか。あまりにも皮相的と思われる。そこでわれわれは、スルターン・マフムード・ミールザーの統治時代、一四九六年のクー・デター事件、一五〇〇年のシャイバーニーによるサマルカンド占領時の三點に的を絞って觀察することにより、この權力抗爭劇の底流を探ってみよう。

第一に、マフムード・ミールザー政權が短命であった理由を考えてみる。先に引用した様に、バーブルは、マフムード政權が不人氣であった理由を三つ擧げている。(1)罪もない王子を殺害したこと。(2)從來の法規や徵稅・徭役の方法を變更

し、ホージャの庇護下にあった貧民やホージャ・アフラールの息子たちからも徴税したこと。(3)マフムード配下のアミール、ことにホスロー・シャーの非道が、都市住民や商人、チュルクや騎兵の別なく住民を恐れさせたこと。(1)から、ティムール家内部の支持を失ったことを、(2)(3)から民衆の反感を買ったことを知ることができる。とくに後者は、本章の冒頭に引用した『ウズベク共和國史』の主張を裏附ける記事である。また、從來とは異なる「法規」とか「徴税・徭役」の方法とかが、具體的に如何なるものであったかを知ることができない現在、確言することは憚られるものの、それらの變更を餘儀なくされたところに、マフムード政權の、とくに財政面での逼迫を感知することができよう。

こうしたことに加えて、さらに(2)からホージャ家の支持を失ったことを知ることができる。先に述べた如く、ホージャ・アフラールと同様に、その息子たちも宗教的權威を背景として政治的に大きな影響力を持っていた。ここで想い出されるのが、一四九六年のクー・デター事件である。クー・デター派のアミールらがホージャカ・ホージャの門口に押掛けた時、ホージャは、「居ない」yoq tur と、一言のもとに彼らのアリー引渡し要求を撥附けている。バーブルはこれに續けて、

> ホージャらの威光は、彼ら(クー・デター派)が武力を行使し得なかった程高かった。

と記している(BN 36b)。當時隨一の實力者であったダルヴィシュ・ムハンマド・タルハンでさえ手が出せなかったのである。また、前述した如く、ホージャ・アフラールが他の追隨を許さぬ程の大地主であり大商人であったと同様に、その息子たちも經濟的に大きな力を有していた。その上、クー・デター事件で、「總ての都市住民」がホージャの影響下に「民衆暴動」を起こしたと述べられていることから明らかな様に、ホージャ家は民衆のエネルギーをも背後に負っていた。このホージャ家を敵に回わしたことは、マフムード政權にとって致命的であった。

また(3)から、「チュルクや騎兵」がホスロー・シャーに敵意を抱いたことを知る。マフムードが歿した時、彼らはホスロー・シャーを攻撃しようとした。これを鎭める一方、ホスロー・シャーをヒサールへと追放したのが、サマルカンドで

権勢を誇っていたアフマド・ハージー・ベグとダルヴィシュ・ムハンマド・タルハンとであった。以上より、マフムード政権下で、ホスロー・シャーをはじめとするヒサールのアミールらと、舊アフマド系のサマルカンドのアミールらとの間に反目があったことを窺い知ることができよう。換言すれば、舊アフマド系アミールとマフムード系のそれとの對立が、マフムード政権を揺がしていたのである。マフムードの歿後、兩者は、ホスロー・シャーを犠牲にし、「談合」してバイスングルを卽位させることによって一時和解するのである。モグールのスルターン・マフムード・ハンの進攻を促したと傳えられるバルラース部のジュナイドらは、この妥協を肯じ得なかった一派と看做すことができよう。

私は、ここで、(3)に都市住民 shahrī と商人 bāzārī、チュルク türk と騎兵 sipāhī がそれぞれ一組となって記されている點に注目したい。まず、「チュルク」といって想い出されるのは、先に引用したユーヌス・ハンの容貌を傳える TR の記事である。そこでは、「荒野のチュルク」と「タジーク」とが對置されている。バルトリドに據れば、タジークは、元來アラブ人を指示する民族名稱であったが、後に、「トルコ人」と對比して「イラン人」を指す語となったという。[43] また、勝藤猛氏に據れば、セルジューク朝の宰相ニザーム・アル・ムルクは、その著作『統治の書』の中で、トルコ人——遊牧、遊牧民・軍人。タジーク人——定着、都市民・農民と區別しており、「トルコ」と「タジーク」の概念は現在でも同様であるという。[44] 一方、間野氏は「ティムール朝の中央最高官廳は、トルコ廳とサルト廳の二大官廳より成り立っていた。前者はトルコ族および軍事の諸問題を扱う官廳であり、後者はイラン族などトルコ族以外の諸民族と財政の諸問題を扱う官廳であった。」と述べているが、[45] ティムール朝の行政機構は、當然のことながら、當時の狀況にマッチした體制であったといえる。また、もしそうであるなら、逆に、ティムール朝政權は、軍事力を提供する遊牧系勢力と財政を擔當する定住系勢力とに支えられていたとも言えるのではないだろうか。こうしたことが、ティムール朝末期のサマルカンド政權にも該當することを示唆しているのが、この記事である。すなわち、圖式化して言えば、サマルカンドのティムール朝政權は、都市住民（商人）に代表される定住民の經濟力と、チュルク（騎兵）に代表される遊牧民の軍事力という二本柱に

支えられていた。そして、支配者層内においては、前者のチャンピオンであり、前者の利権の代弁者でもあったのがホージャ家であり、後者のそれは、言うまでもなくアミール層であった。以上の様に結論できると思う。マフムード政権は、政権の基盤である二本柱のうちの一本――ホージャ家に象徴される定住系勢力の支持――を失い、もう一本――アミールに代表される遊牧＝軍事勢力――に大きな龜裂を入れてしまった。存在基盤を失った政権は、もはや存續の術もなかった。マフムードの死は、ただ單にこの政権倒壊の終止符にすぎない。

マフムード政権が倒れた時點で、ティムール家のミールザーによる支配は實質的に終焉した。バイスングルは、アミールらの「談合」の結果選ばれたのである。實権は、アミールらとホージャ家とが握った。

實権を掌握したアミール層とホージャ家とが、それぞれ眞二つに分れて争うのが、一四九六年のクー・デター事件である。この事件は、最初、マフムードの死をもって一時妥協した舊マフムード系のアミールとダルヴィシュ・ムハンマド・タルハンを頭とする舊アフマド系のアミールとの對立という形をとっていた。クー・デター派にアフマド・ハージー・ベグが加われば、マフムード政権時の對立の圖式と同じであった。しかし、彼は、逆に舊マフムード系側に味方して反クー・デターを起こしている。明らかに、狀況が變化してきているのである。私はここで、アフマド・ハージー・ベグと舊マフムード系でバイスングルの寵臣であったシャイフ・アブドゥッラーとが、同じバルラース族の出身であることに注目したい。バルラースは、モンゴル以來の名族で、ティムール自身（從ってティムール家一族）もバルラース族の出である。これに對して、クー・デター派のタルハン一族は、アルグン族に屬し、スルターン・アブー・サイードが政権を握る際に盡力した[15]のをはじめ、第一章で述べた様に、アブー・サイード家との姻戚關係を利用して勢力を伸張してきていた。アルグン族は、ティムールの頃から活動が知られてはいるものの、とくに目立った働きをしておらず、アブー・サイードの時から急に擡頭した、いうならば新興勢力であった。從って、このクー・デター事件は、ティムール以來の譜代勢力バルラース族と、新興アルグン勢力との主導権争いを基調としていたと捉えるべきである。なお、アミール層が分裂したと同じ

く、ホージャ家内部でも、ホージャカ・ホージャとホージャ・ヤフヤーとが對立し袂を分かつこととなるが、ヘゲモニーを握っていたのは、訌爭の進展狀況からしてやはりアミール層であったと考えられる。

クー・デター派がサマルカンドを奪取した一四九八年以降は、アミール層が完全に實權を掌握し、ミールザーは全くの傀儡と化す。ミールザーの懐には定められたわずかばかりの金額以外一錢たりともはいらず、アミールらに敵意を見せれば、直ちに廢位を迫られる。一方、ホージャ一家は表面立った動きを見せていないものの、バーブルが、ホージャ・ヤフヤーの內應をサマルカンド攻略の頼みとしていた點から考えても、依然、隱然たる勢力を誇っていたものと思われる。ここで注目されるのは、一五〇〇年の段階で、アミールらが、バルラース族出身者も、アルグン族のそれも、また、舊アフマド系、マフムード系、ウマルシャイフ系の區別もなく、一致して反アリー・ミールザーの立場をとっていることである。代表的な人物を擧げてみれば、アルグン族のムハンマド・マズィード・タルハン、スルターン・フサイン Sl. Husayn、バルラース族のカラ Qara、以前にウマル・シャイフの「トルコ廳長官 diwānīyān」であった[47]ホージャ・フサイン Khwāja Husayn、マフムード・ミールザーの「印章官 parwānachīyān」であった[48]アブドゥル・ワッハーブ 'Abd al-Wahhāb の息子ミール・モグール Mir Moghūl といった具合である。この樣に、アミール層は一致してミールザーを廢立しようとしたのであるが、決して、ミールザーに取って代って自分が直接「サマルカンドの玉座」に座ろうとはしなかった。それが彼らの限界でもあった。如何に傀儡と化したとはいえ、ティムール家の權威は彼らの中には依然生き續けていたのである。しかし、「チンギス・ハン」の後裔であるシャイバーニー・ハンにとって、「ティムール家」の權威など全く不要であった。彼は、自ら「サマルカンドの玉座」に卽いたのである。

むすびにかえて

一五世紀末の混亂期を檢討することによって、訌爭の擔手がアミール層とホージャ家とであったとの結論に達した。そ

して、そこから、ティムール朝政権の存在基盤が、軍事力を提供する遊牧系勢力と財務を擔當する定住系勢力という二本柱にあったとの大雑把な見通しを得た。

最後に提言を二つしたい。

第一に、從來言われてきた「アミール＝世襲遊牧貴族」なる公式は、少なくとも、ティムール朝末期のサマルカンド政權下では妥當性を缺くと思われる。私は、第一章で、三人のアミールを取上げて長々と紹介したが、これは、彼らが當時最も有力であったからだけではなく、様々な性格を有する當時のアミールらの代表的人物であると考えたからでもある。すなわち、勇敢で、乘馬を好み、飲んで詩を吟ずる典型的な遊牧戰士アフマド・ハージー・ベグ。敬虔なムスリムである一方、鷹狩りをも好むダルヴィシュ・ムハンマド・タルハン。不信心で、一羽の雌鷄とさえ戰えなかったといわれるホスロー・シャー。また三者は、アフマド・ハージー・ベグが、世襲のアミールとして、ダルヴィシュ・ムハンマド・タルハンが外戚たることを利用して、ホスロー・シャーが稚兒という性格を利し、君主と密接な關係を保つことによって、それぞれ權力を得ている様に、勢力伸張の過程も全く對照的である。以上より、私は、アフマド・ハージー・ベグを「世襲遊牧貴族」と呼ぶことには何ら躊躇を覺えないが、ホスロー・シャーをその様に呼ぶことは決してできない。[49] また、翻って考えてみれば、政權の基盤であるアミール層内に、ホスロー・シャーの如き人物の擡頭を許す餘地を與えた政權の體質そのものが、ティムール朝滅亡の一内部要因であったとも言えよう。[50]

第二に、一五世紀末の訌爭に登場する諸勢力は總てスルターン・アブー・サイードと關係が深いことに注目したい。ウズベグ族のアブル・ハイル・ハンは、アブー・サイードの政權獲得を援助したし、モグールのユーヌスは、逆にアブー・サイードの援助を受けてハン位に卽いた。ティムール朝内部においても、アフマド・ハージー・ベグしかり。タルハン一家しかり。また、ホージャ・アフラールは、アブー・サイードの招聘に應じてタシュケントからやって來ている。以上より、ティムール朝末期の諸事象を考察する上で、アブー・サイード時代の研究・解明が是非とも必要であることを痛切に

感ずると同時に、アブー・サイードの時から、ティムール朝の滅亡までを一つの時代として捉える必要性をも感ずる。間野氏は、「統一と分裂という視點から」、ティムール朝史を、三期――ティムールの死歿からシャー・ルフの死歿に至る第一期（一四〇五―四七年）、シャー・ルフの歿後、アブー・サイードの死歿に至る第二期（一四四七―六九年）、アブー・サイードの死歿からティムール朝の滅亡に至る第三期（一四六九―一五〇六）――に區分しているが、[51] 私は、極めて直觀的に、アブー・サイードがサマルカンドを獲得した一四五一年を境として、大きく二つに區分することを檢討してもよいのではないかと考えている。

本稿は、昭和五〇年に京都大學へ提出した修士論文の一部に手を加えたものである。その際、指導教官の方々、とくに間野英二先生から枚擧に遑ない程の御教示を得た。また、史料その他でも様々に便宜をはかっていただいた。記して厚く御禮申し上げる次第である。

註

① わが國におけるティムール朝史研究の蓄積は、未だ極めて貧弱である。それも、ティムール個人の事蹟を追ったものが大部分で、ティムール朝史全體を一應カヴァーする研究としては、謬かに、間野英二「ティムール朝の社會」（『岩波講座世界歷史』8 岩波書店 一九六九）が擧げられるにすぎない。世界的にも、ティムール個人偏向の研究傾向が顯著である。小論で扱うティムール朝末期に關して、ヘラート政權について論じたものは比較的數多く見られるものの、サマルカンド政權を扱ったものは非常に乏しいのが現狀である。もっとも、概說書、あるいは、註②で示す『バーブル・ナーマ』の翻譯書等には、ティムール朝末期の權力抗爭の概略についての記述が見られる。研究が最も進んでいるのはソ連邦であるが、彼國の研究動向を押えることはなお困難が多い。そこで、編纂書ではあるが、『ウズベク共和國史』*История Узбекской ССР* や『サマルカンド史』*История Самарканда*, т. I, Ташкент, 1969. を、その研究成果の集大成と考えて利用する。とくに、『ウズベク共和國史』は、二卷本で一九五五―五七年に、四卷本で一九六七―六八年に、そして一卷本で一九七四年に刊行されており、彼國における研究の推移を窺うに便利である。唯、小稿で扱う時期に關しては、二卷本と四卷本とでは、その語句に至るまで

ほぼ同一であり、一巻本では、概述されているにすぎない。他に、私が参照し得たものの中で、C. Азимджанова, *К истории второй половины XVв.*, Ташкент, 1957. の第三章ザヒールウッディーン・バーブルとフェルガーナをめぐる闘争（一三三―六二頁）に、一五世紀末のサマルカンドをめぐる訌争についても言及されており、優れていると思われる。

② 現在、われわれが利用できるテキストは二つである。一つは、ハイダラーバード本で、ベヴァリッジの手でそのファクシミリ版が刊行されている（*The Bábar-Náma* by A. S. Beveridge, E. J. W. Gibb Memorial Series vol. I, London, 1905, Rep. 1971.）。もう一つは、一八五七年にロシアのイルミンスキーが校訂してカザンから出版したものである（*Babur-nameh*, edidit N. Ilminski, Cazani, 1857.）。小論では、ハイダラーバード本を底本として利用し、随時、イルミンスキー本を参照することにする（以下 BN で示す葉数は、総てハイダラーバード本のそれである）。尚、翻譯について觸れれば、BN は、チャガタイ・トルコ語文學の傑作として早くから注目され、各國語に翻譯されている（殘念ながら邦譯はない）。幾つかの全譯・抄譯の中で、ベヴァリッジの英譯（*The Bábur-nāma in English* (*Memoirs of Babur*), translated from the original Turki Text of Ẓahiru'd-din Muḥammad Bābur Pādshāh Ghāzi by A. S. Beveridge, London, 1922, Rep. 1969; Rep. in New Delhi 1970.）が最も優れており、參照も易い。寫本、翻譯、その他に關しては、H. F. Hofman, *Turkish Literature, A bio-bibliographical survey*, Section III, part I, Utrecht, 1969, pp. 163―173. を參照のこと。

BN 以外の史料としては、ミールホーンドの『清淨の園』（Mirkhwānd, *Ta'rikh-i Rawḍat al-Ṣafā'*, VII, Tehrān, 1339.）と、ホーンダミールの『道德の伴侶』（Khwāndamīr, *Ta'rikh-i Ḥabib al-Siyar*, IV, Tehrān, 1333. 以下 HS と略す）とが利用できるが、婉曲な言回わしが多く、バーブルの齒に衣着せぬ記述と比較すれば、史料として數段劣る。ティムール朝側の史料としては、ほかに、モンゴル族の系譜集『ムイッズ・アルアンサーブ』（*Muʿizz al-Ansāb fi Shajarat Salāṭin Moghul*, MS. Bibliothèque nationale, ancient fonds persan 67.）が擧げられる。モグーリスターン・ハン國側の史料として、ムハンマド・ハイダルの『ラシードの歷史』（Muḥammad Ḥaydar, *Ta'rikh-i Rashidi* 以下 TR と略す）がこの時代をカヴァーしている。TR は版本が刊行されていないので、イライアス、ロス兩氏の手に成る英譯本（*A History of Moghuls of Central Asia, being the Tarikh-i-Rashidi of Mirza Muhammad Haidar, Dughlát.* An English Version, edited, with Commentary, Notes, and Map by N. Elias, the Translation by E. Denison Ross, London, 1895, Rep. 1972. 以下 TR, Eng. と略す）と、本田實信氏が將來された大英博物館所藏の寫本（MS. British Museum Or. 157 以下 TR, MS. と略す）のマイクロフィルムとを利用する。ウズベグ側史料も非常に利用價値が高い。拙稿「中央アジア・テュルク民族史研究の展望」（『東洋史研究』第三十四卷第四號）の六二―六三頁で簡單に紹介をしておいたので參照されたい。

③ *История Узбекской ССР*, т. I, 1955, стр. 379; т. I, 1967, стр. 510. ここでは、アリーがマフムードの末子と記されているが誤りである。BN や HS を検索した限りでは、アリーは第三子で、末子は、後述するワイス・ミールザーである。

④ HS にはウワイス Uways と記されており、『ウズベク共和國史』等もこれを採用しているが、ここでは BN や TR に從ってワイスとしておく。

⑤ 政治的・軍事的能力に缺けた人物であったらしく、一四九六年にバーブルらと呼應してサマルカンドを攻撃した際も、バイスングルの寵臣シャイフ・アブドゥッラー Shaykh 'Abdallāh の娘を娶ると、サマルカンド占領という大きな目的を棚上げにしてヒサールへ歸還し、二度とサマルカンド占領を企てることはなかった。バーブルは、「彼の進擊の目的は彼女にあったようだ」と冷笑している（BN 38a—38b）。

⑥ ティムール家のアフマド、マフムード兄弟と紛わしいが、モグーリスターン・ハン國のハンであるマフムードにも、アフマドという名の弟が居る。本稿では、ティムール家のそれらには「ミールザー」を、モグールには「ハン」を附けて區別する。尙、TR, Eng. の索引には、兩者を混同しているものがあるので、利用には注意を要する。

⑦ mastam ey muḥtasib emrūz zi man dast be-dār
iḥtisābam be-kon ānrūz ke yābī hushyār

ムフタシブ muḥtasib は、イスラーム法が遵守されているかどうかを見廻り、違反者を罰する監督官である。その職務は、主として商取引や日常生活一般に關するものであった。ティムール朝治下においても同樣で、この場合は、飮酒に對する「見廻り」である（*The Encyclopaedia of Islām*, vol. III, Leiden, 1936, pp. 702—703; H. R. Roemer, *Staatsschriben der Timuridenzeit, Das Ṣaraf-Nāmä des 'Abdallāh Marwārid in kritischer Auswertung*, Wiesbaden, 1952, SS. 150—151. を參照）。

⑧ ナワーイーに關しては、幾つかの研究が發表されているが、彼の事蹟を追いつつ、一五世紀後半のティムール政權の政治史を研究したものとして、B. B. Бартольд, Мир Али-Шир и политическая жизнь, *Сочинения*, т. II, часть 2, Москва, 1964, стр. 197—260. が擧げられる。尙、その英譯本 V. and T. Minorsky (tr.), Mir 'Ali Shir, *Four Studies on the History of Central Asia*, vol. III, Leiden, 1962, pp. 1—72. が利用には便利である。

ブランは、この時ナワーイーが、アフマド・ハージー・ベイとダルヴィシュ・ムハンマド・タルハンとの世話になったとしているが、何に據ったかは不明である（M. Belin, Notice biographique et littéraire sur Mir Ali-Chir-Névâïi, *JA*, XVII (1861), pp. 185—186.）。

⑨ 『ムーイッズ』に據れば、アフマド・ミールザーのアミールたちのうち、アフマド・ハージー・ベグはその第四位に、ダルヴィシュ・ムハンマド・タルハンは第六位にランクされており（*Mu'izz al-Ansāb*, 154*a*）、ウズベグ史料でも、兩者は、後述するアブドゥル・アリー・タルハンとともにスルターン・アフマド・ミールザーの高位のアミールとして列擧されている

(*Tawārīkh-i Guzīda—Nuṣrat-nāma*, MS. British Museum, Or. 3222, 124b; Benā'ī, Shaybānī-nāma, *Материалы по истории Казахских ханств XV—XVIII веков*, Алма-Ата, 1969, 以下 МИКХ と略す、стр. 109)。尙、*Tawārīkh-i Guzīda*... では、アフマド・ハージーをムハンマド Mḥd ハージーと記しているが、Shaybānī-nāma の記事と對照してみれば、これがアフマドの誤寫であることは明らかである。

⑩ これに關しては、惠谷俊之「荅剌罕考」(『東洋史研究』第二十二卷第二號)で取扱われているが、當時のタルハンが具體的にどの様な特權を有していたかについてはなお不明である。ウズベグ史料は、ダルヴィシュの弟ムハンマド・マズィード・タルハンや、從兄弟のアブドゥル・アリー・タルハンをキシリク Qïshlïq の後裔としており、當時の中央アジアで、チンギス・ハン時代のキシリク、バダイの故事が流布していたことを窺い知る(*Tawārīkh-i Guzīda—Nuṣrat-nāma*, 124a; *Тавāрӣх-и гузӣда—Нусрат-нāме*, изд. А. М. Акрамова, Ташкент, 1967, ṣ. 273, 274. 尙、本書は、中見立夫氏の御好意により、氏の所藏本を拜借することができた。記して謝意を表す)。

⑪ 當時の nukr (<nökör) とアミールあるいはミールザーとの關係は、モンゴル時代のそれとは異なっていたと思われるが未だ詳らかではない。僚友とも隷屬民とも言い難い。小論では便宜的に從士と譯しておく。

⑫ 現在の東西トルキスタンとは異なり、當時の史料に現われるトルキスターン Turkistān は、ヤス(現在のトルキスタン市)を中心としたシル河中流域地方を表示していた。

⑬ chuhra edi. この部分は、ハイダラーバード本では缺落しており、イルミンスキー本(三六頁)にのみ見える。

⑭ 一四六九年二月八日に、スルターン・アブー・サイードがアーゼルバイジャーン遠征の途次歿したことをいう。

⑮ 間野英二氏の御教示を得た。

⑯ *Mu'izz al-Ansāb*, 154b.

⑰ Б. Г. Гафуров, *Таджики, древнейшая, древняя и средневековая история*, Москва, 1972. стр. 493. 『ウズベク共和國史』は、一マン=八プード(一プード=一六、三八キログラム)としており(*История УзССР*, 1967, стр. 482 при.)、これに從って穀物の重量を計算すると一萬トン以上の價を得る。前掲の *Таджики* では、これを誤りとして退けている(Б. Г. Гафуров, *Таджики*, стр. 493 при.)。ヒンツに據れば、マンの價は、地域・時代によってまちまちではあるが、ティムール朝治下のイランでは嵩ばる品物の場合一マン=約三キログラムであり、金帳汗國の首都サライでは一、九一二キログラム、ウルゲンチ・オトラールでは一、八八キログラムだという(W. Hinz, *Islamische Masse und Gewichte*, Handbuch der Orientalistik, Erdänzungsband 1, Heft 1, Leiden, 1955, SS. 18, 22.)。また、Е. А. Давидович の計算に據れば、八萬マンは、七五〇〇ヘクタールから上がる收穫の十分の一に當たるという(О. Д. Чехович, *Самаркандские документы XV—XVI вв.*, Москва, 1974, стр. 24.)。

⑱ *История УзССР*, 1967, стр. 483.

⑲ 間野「ティムール朝の社會」三一九—二二頁參照。

⑳ 例えば、ホージャ・アフラールのワクフ文書には、彼の死後、息子のホージャ・ヤフヤーが、或いは、ヤフヤーとその兄のホージャ・ムハンマド・アブドゥッラーの二人が、父の後を継いでワクフの管理者 mutawallī となるよう定めたものがある（*Самаркандские документы*, стр. 173, 240, 290）。

㉑ この間の事情に關しては、間野英二「十五世紀初頭のモグーリスターン――ヴァイス汗の時代――」（『東洋史研究』第二十二巻第一號）一七―二〇頁を參照のこと。

㉒ マフムード・ミールザーに嫁いだのが、スルターン・ニガール・ハヌム Sl. Nigār Khānīm で、ワイス・ミールザーを儲けた。ウマル・シャイフに嫁いだクトゥルク・ニガール・ハヌム Qutluq Nigār Khānīm は、バーブルの母親である。

㉓ タシュケントという要衝を占め、血縁的にもティムール家の內紛を充分に利用しえた彼が、ウズベグ族のシャイバーニーに名を成さしめた最大の原因は、モグール勢力を統一できなかった點に求められよう。モグーリスターン內部における定住派と遊牧派の爭いは、ユーヌスの時から持上がっていた問題である（間野「十五世紀初頭のモグーリスターン」二二頁參照）が、マフムード・ハンの時も、遊牧派のアミールたちは、マフムードの弟スルターン・アフマド・ハン Sl. Aḥmad Khān を奉じてマフムードとは別行動をとっている。TR は、こうした一派、とくに實戰經驗豐かな指揮者を缺いたことが、遠征の失敗や敗戰の理由だとしている（TR, Eng., p. 119; TR, MS., 81b—82a）。

㉔ これに關しては、Б. А. Ахмедов, *Государство кочевых Узбеков*, Москва, 1965. がやや問題はあるものの總合的でしかも優れた研究書である。

㉕ この事件が、シャイバーニー擡頭の發端となったことは事實で、ムクミノーヴァなどは、一四八八年をシャイバーニー・ハンの卽位年と考えている（Р. Г. Мукминова, *К истории аграрных отношений в Узбекистане XVI в., по материалам «Вакфнаме»*, Ташкент, 1966, стр. 5.）。私は、シャイバーニーの卽位は一族の結集に成功した一四九六、七年の交（後述）だと考えている。

㉖ ウズベグ史料に據れば、シャイバーニーは、チャガタイの國 Chaghatay wilāyat へアッバース 'Abbās なる人物を派遣して、ハムザ・スルターン Ḥamza Sl.、マフディー・スルターン Mahdī Sl. 兄弟を連れてこさせたと傳えている（*Tawārīkh-i Guzīda—Nuṣrat-nāma*, MS. 130a; Benā'ī, Shaybānī-nāma, МИКХ стр. 122.）。一方 BN は、回曆九〇二年（一四九六／七）冬に、ハムザ、マフディー兄弟がサマルカンドのバイスングルのもとから去ったと記している（BN 38b）。兩史料から、遊牧ウズベグ集團の集結は、一四九六―七年頃であったと結論することができる。

㉗ ティムールがサマルカンドの內城內に建設した宮殿であるが、ティムール家の某王子がここへ送られるという隱喩は、すなわち殺されるということであった（BN 37a）。

㉘ 彼には、元來、玉座に卽く權利も與えられていなかったという（BN 23b）。

㉙ *Tawārīkh-i Guzīda—Nuṣrat-nāma*, MS., 129a; Benā'ī,

Shaybānī-nāma, МИКХ, стр. 121—122.

㉚ ba'ẓī beg vä begāt vä sipāhīlär (BN 36b) ここで問題となるのは begāt であろう。エックマンに據れば、-āt, は複數を表わすアラブ語女性語尾である (J. Eckmann, *Chagatay Manual*, Bloomington, 1966, p. 79.) が、他の用例、例えば、beglär vä begātlar〔vä〕yigitlär (BN イルミンスキー本、二二頁) などから判斷して、私は、begāt が、單なる beg の複數形ではなく、beg より一段低い階層の者を表示する術語であると考える。それ故、ベヴァリッジの譯 other begs, great and small, and soldiers(Beveridge, *Bābur-nāma in English*, p. 62.) は妥當かと思われる。ただ、beg, begāt, sipāhī, 或いは yigit などが、ティムール朝支配階級のヒエラルキーの中でどの様に位置附けられるかについては今後の研究を待たなければならない。

㉛ ḤS ṣ. 231.

㉜ サマルカンド近郊の村落で、有名なファールス地方の中心地シーラーズではない。ティムールは、サマルカンドが世界の中心であることを誇示して、周圍の村落に西アジア各地の大都市名を附けている。

㉝ この牧地は周圍を取圍むように川が蛇行している爲に、出入口が狭く、本陣を置くには恰好の場所であった (BN 48a)。

㉞ BN 44b. 尙、ḤS はラビー第二月としている (ḤS ṣ. 234) が、檢討した結果、それが誤りであることを知った。バーブルが翌年サマルカンドを出立するまで、「百日間」サマルカンドを支配したとの BN 53a—53b の記事が正確だと假定すれば、バーブルのサマルカンド入城は一一月二三日のことである。

㉟ ウズベグ史料には、シャイバーニーに率られたウズベグ族がしばしば掠奪を敢行した記事が散見するが、BN は、マー・ワラー・アンナフルの一村落 (Yār-yaylaq) がモグールやウズベグの掠奪に苦しめられていたことを「その地方では、もし城壁がなかったならモグールやウスベグの爲に、如何なる村も存在しまい」と記している (BN 59b)。

㊱ この間の狀況は、С. Азимджанова, *К истории Ферганы второй половины XV в.*, стр. 39—49. に詳しい。尙、TR に據れば、この二年間の爭いは主としてアミールらの反目によるものだという (TR, Eng., p. 154 ; TR, MS., 108a)。アミールらの發言力の大きさを物語る記事である。

㊲ ムクミノーヴァは、一六世紀の諸史料を檢討して、ichki がベク (アミール) より一段低い階級の宮廷官吏で、君主の側で仕えた廷臣であったとしている (Р. Г. Мукминова, К изучению среднеазиатских терминов, *тагджа, сукнийат, ички*, «Письменные памятники Востока, 1968», Москва, 1970, стр. 130—134.)。側近と譯しておく。

㊳ この時モグールのマフムード・ハンは、五千人の援軍を送っている (*Tawārīkh-i Guzīda—Nuṣrat-nāma*, MS., 130a.)。ウズベグ族單獨の軍勢ではない。

㊴ Р. Г. Мукминова, *К истории аграрных отношений в Узбекистане XVI в.*, стр. 66 を參照。

㊵ ウズベグ史料では、彼が醉ぱらってクハクから轉落、死亡したと記されている。nechä kündin song Sulṭān 'Alī Mīrzā

mastlighda *Kuhakdin* yiqilip ölip turur (*Шейбаниада*, изд. И. Березин, Казань, 1849, s. 88.) *Kuhak* は河川名であるから意味が通じない。ベレズィンは、これを kushk の誤りと見て「亭から」с киоска 落ちたと譯み(*Шейбаниада*, стр. LXXIII)、ベヴァリッジは、「コヒク(コハク)河へ」into the Kohik-water と解している(Beveridge, *Bābur-nāma in English*, p. 128 n. 2.)。尙、ヴァムベリーは、「コハク河の岸沿いに馬を驅っていた際に偶然にも溺死した」と記している(A. Vámbéry, *History of Bokhara*, London, 1873, Rep., 1973, p. 253 n. 2.)が誤りである。

これに對して、ティムール朝側の史料では、アリーは殺害されたとしている(BN 80b; HS s. 279)。前後の事情より判斷すれば、彼は殺害されたと考えるのが妥當であろう。

㊶ *Истории Узбек*, 1955, стр. 379; 1967, стр. 507—508.

㊷ *Там же*, 1955, стр. 379; 1967, стр. 507.

㊸ *EI*, vol. IV, pp. 598—599.

㊹ 勝藤猛「『統治の書』について」(『東洋史研究』第三十四卷第四號)七一—二頁。

㊺ 間野「ティムール朝の社會」三〇九頁。

㊻ この點に關しては、昭和五一年一月一六日に東洋文庫の「イスラム國家論」研究會で「ティムール朝末期の權力抗爭をめぐって」と題して口頭發表した際に、岡田信弘氏から御敎示を得た。尙、同研究會では、岡田氏のほか、護雅夫氏をはじめ多くの方々から樣々な御示唆を賜った。記して謝意を表す。

㊼㊽ *Mu'izz al-Ansāb*, 155a. 尙、諸官職に關しては、間野「ティムール朝の社會」三〇六—三一三を參照されたい。

㊾ ダルヴィシュ・ムハンマド・タルハンの屬するアルグン族については、未だ不明な點が多い。今後の研究を待ちたい。

㊿ マンスーラ・ハイダルは、最近發表した論文で、ホスロー・シャーをはじめとするアミールらについて觸れているが、彼らの「實力」を輕視している。女史に據れば、ティムール朝の政體は一種の專制君主制であり、王朝の衰退・分裂期にもその傳統は存續していたという。インドの研究動向を知るには有益であるが、論文それ自體は、注目に價する程のものではない(M. Haider, The Sovereign in the Timurid State (XIVth—XVth Centuries), *Turcica* VIII-2, 1976, pp. 61—82.)。

(51) 間野「ティムール朝の社會」三〇〇—三〇一頁。

On the Internal Troubles at the End of the Timurid Dynasty

Tōru Horikawa

From 1494 till 1500, there were troubles within the Timurid governing class at Samarqand. They had been involved with the princes of the Timurids (*mīrzās*), the *amīrs*, the sons of the Khwāja Aḥrar, and the khans of the Moghuls and Özbegs; and this directly caused the fall of the Timurids and the rise of Shaybānī Khan Özbeg.

Our investigations of the troubles let us to the following conclusions: 1) The government of the Timurids was supported by two pillars, the *amīr*s and the *khwāja*s. The former controlled the nomadic peoples who were charged with military affairs and the latter had a similar relationship to the settled classes who were engaged in economic affairs. 2) The basis of the troubles lay in rivalries among the *amir*s (for example, a party of the late Aḥmad vs. Maḥmūd, and the Barlās' *amīr*s vs. those of Arghūn), while the *mīrzā*s were merely their puppets. 3) The character of the *amīr*s had changed when compared to Tīmūr's day; thus we cannot always term them "patrimonical-nomadic nobles."